

## 科学技術・イノベーション基本計画の進捗確認における見解（案）

## 1. 多様で卓越した研究を生み出す環境の再構築

- (1) 博士課程修了者のキャリアパスの多様化については様々な取組が展開され、基本計画上の達成目標の実現が期待される一方で、これまでとられているデータの多くは「研究職に就くこと」を主軸に置いたものとなっており、研究職以外のキャリアパスについて「見える化」が十分にできないおそれがある。
- (2) また、キャリアパス多様化のトレンドを的確に把握するためには、これから就職を控えている現役の博士課程学生の意向や、修士課程の学生の進学／就職に関する意向などを知ることが重要である。
- (3) このため、博士課程修了者のキャリアパスの多様化については、指標となるデータの取り方についてより一層の工夫が求められる。
- (4) 加えて、近年は生涯賃金などの観点も含めて極めてシビアに自身のキャリアパスを考える傾向があることを踏まえれば、多様なキャリアパス間でそうした観点からの比較を行うために必要なデータの収集や指標の開発が望まれる。

## 2. 新たな研究システムの構築（オープンサイエンスとデータ駆動型研究等の推進）

- (1) オープンサイエンスについては、G7 科学技術大臣会合を念頭に入れ、我が国として明確な方針を示すことが必要である。今後、国際的に日本が存在感を高めるためには、オープンサイエンスの進捗に関する標準的な計測方法が確立されていない現状を踏まえ、まずは、オープンサイエンスに関する共通認識を概念化することも重要である。

- (2) プラットフォーム構築など環境整に関する指標は整備されつつあるが、データ駆動型研究の推進、研究システムや社会の変革に関する進捗や達成状況の評価までは至っていない。例えば、定量指標が難しいならば、我が国における成功事例を分析し、国内外に発信することが必要である。
- (3) 国際的にはインパクト・ファクターなどの定量的指標への偏重傾向に対する批判があり、定性的情報も併せて研究の質的な評価も併用することや、社会への影響も踏まえた評価が求められている。これは学術ジャーナル問題を含むオープンアクセスにも密接に関係しており、国やFAにおいてもこれを考慮するとともに、アカデミアも研究の自律性の観点からも主体的に検討する必要がある。
- (4) 研究データの産業界における活用も、オープンサイエンスの推進の意義として重要な視点である。

### 3. その他全般的事項

- (1) 定期的な調査や統計データを用いて進捗状況の確認を行う場合、数年に一度しかとれないデータがあるなどデータのリアルタイム性について大きな課題がある。
- (2) このため、各府省が実施している施策や事業を通じて進捗状況の確認に資するデータがとれないかなど、進捗確認のための方法論の改善についてさらに検討を進めるべきである。